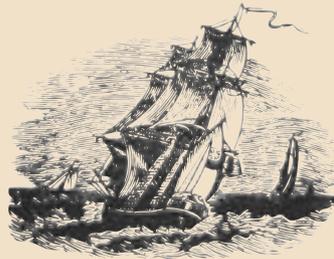


羅針盤



HPV 型特異的細胞変性 / 細胞病原性効果 (CPE)

江川 清文

Kiyofumi Egawa

東京慈恵会医科大学皮膚科 非常勤講師

“真理は単純にして、かつ美しい”
——いわずと知れた、ワトソンとクリックが DNA の二重らせん構造にたどり着いた哲学的信念です。私の、研究における座右の銘でもあり、実験ノートの最初のページに書いてあります。科学の真似ごとでもいいからしてみたかった私は、研究の作業仮説を立てるとき、実験結果について考えるとき、いつもこの言葉を心に思い描いていました。そして、この言葉にぴったりあてはまるのが、HPV 感染症だったのです。時間はかかりましたが、基底表皮様嚢腫の発症病理として長く信じられていた「外傷等による表皮の真皮内迷入説」に対し「HPV60 感染によるエクリン汗管の類表皮化生説」にたどり着いたのも、この言葉のおかげです。

“真理は単純で美しい”を片方の手にしましたが、HPV 感染症を simple (単純) な系にしてくれたのが、ここで述べる“HPV 型特異的 CPE” (cytopathic/cytopathogenic effect) の概念です。この 2 つを両の手にしたことで、HPV 感染症の臨床や研究は実に楽しく面白いものになりました。

私は、20 数年前、今日“くろいぼ”の愛称でよばれる疣贅に出会いました。顕微鏡的に綺麗な好酸性細胞質内封入体を認めたのがきっかけでしたが、やがてほかの疣贅とは異なり少し色が黒いことに気づきました。

HPV 研究に直接の指導者をもたなかった私は、大先輩である Jablonska 教授の言う“HPV 型特異的 CPE”の概念を文字通り羅針盤として研究を進めました。“HPV 型特異的 CPE”とは、HPV 感染症の臨床・病理



と HPV の型が特異相関するというものです。HPV ワクチンの実用化をはじめ子宮頸癌の原因ウイルスとしての HPV 研究の重要性はいうまでもありませんが、私は、近年の HPV 研究の最大の成果は、HPV の遺伝子の多様性の発見と、それに伴う本概念の発見にあると考えています。HPV 感染症が、遺伝子型とその表現型の関連を研究するのに優れた自然観察モデルと

なったからです。

ある皮膚病変が、そこにそうしてあること——選ばれた患者さんの、その部位に、その形と色と症状であることには、必ず相応の理由があります。“HPV 型特異的 CPE”の概念に従えば、黒いことや特異な封入体に対応する HPV が必ずあるはずで、実際、後に HPV4/60/65 との特異相関がわかりました。HPV63, 88 や 95 の発見もこの概念に従った結果です。HPV の発癌能や解剖学的部位親和性の型による違いなども、本概念を通して考えることにより、さらにその意義が明らかになると考えています。

この企画を依頼されたとき、私は奄美大島にある国立ハンセン療養所の奄美和光園に在籍していました。本号の完成を前に“最後は、やはり HPV との道行きで”と身を東京慈恵会医科大学に転じましたが、先のことは自らの羅針盤の正しいことを信じるしかありません。私の意を汲んで下さり暖かく送り出してくださいました入所者、園のスタッフや島民の皆様、この場を借りまして心よりお礼申し上げます。

(写真：奄美和光園治療棟にて)